

理想自己と現実自己の差異にみるパーソナリティ

—向性検査を手がかりとして—

渡邊 千鶴

宮城学院女子大学人文科学研究科

■ 目的

本研究では、現実にごうであると認知しているありのままの自己(現実自己)と是非ともこうありたいと希望する自己(理想自己)の2つの自己評定でとらえた性格像に、いかなる差異が見られるか。また、そのズレはどこに、なぜ生じるのか検討することを目的とする。

■ 方法

被験者：宮城学院女子大学の学生 99 名を対象とする質問紙調査を実施した。

質問紙：「内向性 - 外向性検査」(I-E テスト)を用いた、外向性・内向性について 20 の質問項目で構成されており、3 件法で回答させる。なお、現実自己と理想自己の評定をさせるため、同様の質問紙 2 枚を用い、2 通り評価軸で解答させた。

現実自己の評定

質問項目を 1 番から順に読み、それが「ありのままの現実の自己」によく当てはまる場合は「はい」を○でかこむ。あてはまらないと思ったら「いいえ」を○でかこむ。どちらとも決められない時は「？」を○でかこむ。

理想自己の評定

同じく質問項目を読み、「是非ともこうありたいと思う理想的な自己」に当てはまる場合は「はい」を○でかこむ。当てはまらないと思ったら「いいえ」を○でかこむ。どちらとも決められない時は「？」を○でかこむ。

■ 結果

現実自己と理想自己の評定値の差を因子分析によって分類した結果、次の5つの因子が抽出された(表1)。
1.新しい環境 2.積極性 3.自信 4.活動性 5.社交性

これらの5つの因子に含まれる項目の評定平均値を用いて、評定対象(2種類)×因子(5項目)の2要因分散分析を行った結果、評定対象要因の主効果と相互作用が有意であった(それぞれ $F(1,15)=138.68$, $p<.01$, $F(4,15)=3.48$, $p<.05$)。

また、相互作用の下位検定の結果(Ryan 法による多重比較)は、活動性因子にのみ現実自己と理想自己の評定にのみ、有意差がなかった。

表1：因子分析の結果

因子	因子名	項目	因子負荷量		
1	新しい環境	人とすれ違いになる	0.658473		
		知らない人にあうのは苦にならない	0.6193		0.344628
		新しい場所や新しい環境などにすぐ慣れる	0.593616		
		初対面の人と話をするのは骨が折れる*	0.582867		
		大勢の人が集まったところではうしろにひっこんでいる*	0.510767		
2	積極性	大勢の人が集まったところではうしろにひっこんでいる*	0.468507		
		ちょっとしたことでもまごつきやすい*	0.420737	0.378666	
		人が集まって話している部屋にひとりて入るのに気後れしない	0.401856		
		危険や困難なことにぶつかってもしりこみしない	0.317382	0.389755	0.355122
		人に	0.311516		
3	自信	見知らぬ人からしるし見られるように感じたことがある*		0.607524	
		知人が成功したのを聞くたびに自分が敗北者のように思う		0.517882	0.316237
		人に失望することが多い*		0.458114	
		人からからかわれて辛気である			0.485342
		無口である*	0.359813		0.453349
4	活動性	人の話を聞くより先自分が話し手になる方である			0.440845
		責任の前でもそれほどかたくならない			0.356378
		用心深いたちである*			0.346687
		自分が気に入ったわずかな人しかつきあわない*			0.73339
		パーティや社交的な集まりが好きである	0.416805		0.484359

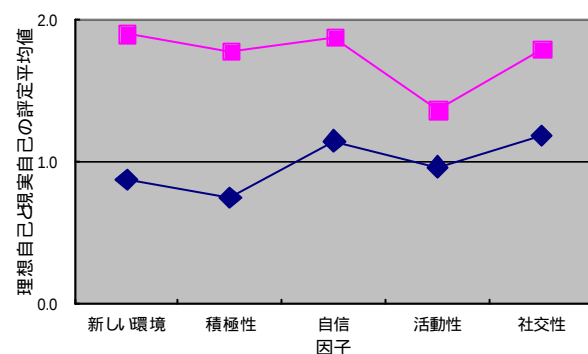


図1：各因子ごとの理想自己と現実自己の差

■ 考察

これらの結果から、全体として現実自己が、より内向的であり理想自己がより外向的であるといえる。これは、誰も理想は現実よりも高く持つ、という傾向にあることがわかる。

しかしながら、活動性の因子項目にのみ現実自己・理想自己には有意差がみられなかった。ゆえに、活動性についての理想自己に限っては、やや内向的といえる。

この要因として考えられるのは、本研究の対象となった被験者が、すべて 20 代の女性であったこと。つまり、女性であるゆえに、おとなしく、つつましくありたいという、ジェンダー的要素が背景にあるのではないだろうか。